



南紀白浜—東京・羽田 導入されることになっ

と、売り上げで35・1%、旅客数で60・3%増えたという。 県や地元市町、観光関係団体はこの3カ月間、利用を積極的にPRしていた。その結果、4月(1万1957人)と

た。このため、県は割引制度の導入で利用増を図ろうと、JALに働きかけた。売り上げが増えれば10月から正式導入され、下回れば、割引制度の導入が見送りになり、35

(鹿兒島県) だけだった。 立谷誠一白浜町長の話 田辺西牟婁地方の行政や議会、民間団体が、視察や政務調査の日程を前倒しするなど官民一体に



「紀伊山地の霊場と参詣道」がユネスコの世界遺産に登録されて3年。山岳霊場や参詣道と、それらを取り巻く文化的景観という世界でも特殊な遺産の「いま」を、あらためて取材して浮き彫りになった課題は「どう保全し、どう活用するか」だった。

文化的景観は、自然と人間の長い時間をかけた営みによってつくられる。それらの保全に関しては、自然景観や建築物を守ることとは、また違った難しさがある。

熊野古道沿いに、のどかな山村風景が広がる田辺市本宮町の伏拝地区に住む松本和也さん(71)は「この景観を守ってきた集落はい



ま、集落を維持することすら難しくなっている」と話す。住民の生活は、文化的景観の保全と密接にかかわるが、そこに

いま、深刻な過疎化、高齢化という問題が立ちほだかっている。

紀伊山地の世界遺産登録後、国内では知床(北海道)が2005年、世界自然遺産に登録され、この7月初めには、ユネスコの世界遺産委員会が石見銀山(島根県)を世界文化遺産に登録する決議が採択された。

新しい世界遺産が登場し、熊野

世界遺産の保全と活用

現場を歩いて答えを探そう

地域では、ツアー客を乗せた大型バスが引きも切らなかつた当初の熱は冷めた。しかし逆に、語り部の説明を聞いて、じっくり古道を歩きたいという個人客や少人数のグループは増えている。

行政や語り部などの民間団体、地元住民らは今後、これらの「熊野ファン」層をも巻き込んで互いに声を掛け合い、知恵を出し合っ

て、文化的景観の保全に取り組むことが必要になる。

「世界遺産の保全と活用は対極にあるといわれるが、交わる点はあるのではないかと」と県世界遺産センター長の辻林浩さん(63)。「活用」という言葉を借りた「観光のための開発」が怖い。世界遺産としての価値を守らなければ、人も来なくなることを心掛ける必要

がある」とも指摘する。

熊野本宮語り部の会の坂本勲生会長(78)は「語り部は、ただ観光客を案内するだけではなく、常に古道の保全管理に気を配らなければならぬ」。同じく語り部団体「探探古道の木下幸文会長(82)は「道を守るために必要なことは歩くこと」と繰り返す。

大辺路街道では、埋もれた道を

民間団体などが刈り開いてきた。大辺路刈り開き隊の辻田友紀代表(46)は「維持作業が大事。これからの地道に活動を続け、保全活動のできる後進も育てたい」と抱負を語る。

活用という意味では、増加傾向にある外国人観光客への対応も必要だ。熊野が世界の宝として認められた以上、各国からの来訪者にとって、いかに親切で、再び訪れたい土地にするかは、地域全体の課題になる。

熊野古道が通る中辺路、本宮地区を担当している記者(27)は、取材を通して「この世界遺産の奥深さは、何回も足を運んでこそ分かる」と実感した。世界遺産登録時の取材にかかわった記者(30)も、現状と課題を取材して、久しく遠ざかっていた古道を、また歩いてみたくなった。

古道は長く、世界遺産の指定地域は広い。保全や活用には難しい問題があるけれども、歩いてみれば答えが見つかるだろう。(E)

サンゴ産卵

明るい大水槽に ゆ～らゆら

串本海中公園

1種は今年初

串本町有田、串本海中公園センター水族館の大水槽で、サンゴの産卵が始まった。1998年から毎年確認されており、今年16日までに3種計5群体が確認されている。うち1種類は今年初めてで、御前洋館長は「2月に大水槽を全面改

修し、水槽だったのがよ」と話した。6月四方大水槽には産卵が確認された。シハタミドリイシ、ミドリイシ、ドリイシ、クシハタミドリイシ、ギノキミドリイシ、新たにでは一般的サンゴの仲間ミドリイシ、海中公園水槽内の照り白い砂を入



18日(土) 時11時半 長水産▽午後2時15分、業協同組合 事業センタ